

私のなかの歴史

愛は血よりも濃し

①

東日本大震災では、両親2人とも失った子どもたちが岩手、宮城、福島3県で180人以上に上ります。ぼくは国内約7千世帯が登録している財団法人全国里親会(東京)の会長を務め、子どもたちの支援活動を行っています。国内外から寄付の申し出が相次ぎ、あらためて人々の温かさ、心を打たれました。

被災地の児童相談所の児童福祉司に協力してもらい、里親会のメンバーが子どもの避難場所を訪ね歩いて渡そうと思っています。

一時金の配布方法を振り込みせず、手渡しにしたのは、子どもたちの心のケアのためです。3月下旬、里親会の理事ら2人を宮城、岩手両県に派遣し、現地の状況を確かめました。情報収集に苦労しましたが、子どもたちには今、精神的な助けが必要だと分かりました。親や家、友人を失ったつらい気持ちをためこむ子どもが多く、周りの大

震災直後の3月18日、大震災子ども救援基金を設けたところ、5月末時点で計3千万円超も集まりました。このほか、日本少額短期保険協会は年100万円を10年間にわたって寄付してくれました。6月に入ってから、アサヒビール、アサヒ飲料の両社から計680万円の寄付の申し出がありました。

黒松内つくし園理事長

ひろ せ せいぞう
瀬 清蔵 さん

全国里親会会長として厚生労働省を訪れ、孤児への支援拡大を求めるべく(中央) 2010年



人たちもどう接すればいいのか迷っているのです。

里親会では、心理学の専門家らの助言をまとめた手引書を作成し、被災地の避難所や各家庭

1922年(大正11年)、美唄市生まれ。小樽市立商業学校卒。戦前、戦後間もなくは小樽郵便局などに勤務。50年、診療所建設のために黒松内へ。56年、後志管内三和村(現黒松内町)で児童養護施設黒松内つくし園を開設。理事長を務める社会福祉法人黒松内つくし園は現在、町内外で10の社会福祉施設を運営する。日本福祉施設士会会長などを歴任し、2009年から全国里親会会長。01年勲四等瑞宝章、06年北海道功労賞を受賞。黒松内町名誉町民。89歳。



長期にわたる養育費の確保も課題になります。親族も「里親」として申請すれば、生活費の支給を受けられますが、今のところ申請はわずかです。現地在混している上に、制度を知っている人が少ないのです。子どもたちを訪問した時に、制度の周知も図ろうと思っています。

ぼくは、間もなく90歳です。住んでいる後志管内黒松内町から、毎週のように札幌や東京へ出張するのは、正直体がきついけれど、生涯現役を貫きたいと思っています。「人さまのため」に働けるのは幸せだなあ」と思うからです。

でも、自分自身が立派な人間だと思っただけではありません。若いときは他人を押しつけて、出世することしか考えていまして、利己心のかたまりだった自分が、なぜ福祉の道に進んだかということです。人生の岐路に、さまざまな人との出会いがあったから、自分を変

わることができたのだと思います。(聞き手・長谷川善威)

震災孤児

里親会で支援奉仕は幸せ

私のなかの歴史

愛は血よりも濃し

②

省線(後の国鉄)を退職後、三菱鉱業美唄鉄道に務めていた父清作の思い出はあまりないんです。ぼくは、父が50歳の時、5人きょうだいの末っ子として美唄市で生まれましたが、15歳だった1937年(昭和12年)に父は他界したので、一緒に過ごした記憶は少ないのです。

父は口癖のように、ぼくに「坊シを振るっていた。一人だけ楽をせず、作業員と一緒に働く姿は印象に残っています。」

父は口癖のように、ぼくに「坊さんになれ」と言っていました。信仰心のあついで、たびたびぼくを寺に連れていき、説教を聞かせました。時には自ら壇上に上がって説教していましたね。主に感謝の大切さを訴える内容だったと思います。

それでも、母マサヨが腸捻転になり、後に北海道社会事業協会の理事長も務めた滝本庄蔵先生の診察を受け入院すると、父は鉄道の線路補修の現場に、

当時4歳だったぼくを毎日連れていってくれました。責任者だった父も先頭に立ち、作業員十数人と掛け声を合わせてツルハ

黒松内つくし園理事長

ひろ瀬 せい蔵 さん



6歳のころのぼく(前から4列目の左端)。校長先生にかわいがられ、いつもそばにいました

母も一斗缶で菓子を買っては、近所の子供に分け隔て無く与えていました。思えば、感謝と思いやりという福祉の根幹は、両親から学びました。

美唄の沼東尋常高等小学校で学びました。子供が多く家計が苦しかったので、37年には札幌の通信講習所に入りました。

父と同じ鉄道マンも考えました。父と同じ鉄道マンも考えましたが、郵便局の方が早く任官でき、給料は高等小学校卒の作業員などの給料と比べると、ほぼ

倍の月30円ももらったのです。道内では1800人が受験し、60人合格した中で、ぼくは14歳と最年少で、上から3番目の成績でした。当時は出世のことばかり考えていて、高等文官になるのが夢でした。だから、かなり無理してガリ勉強しました。1日4時間しか寝ませんでしたから。

1年後の卒業時も成績が良く、給料は同期生より日給で5銭高かった。初任地は岩見沢郵便局為替係でしたが、給料が高くないで同僚にいじめられました。その後、小樽郵便局に勤めながら、小樽市立商業学校(夜間)をトップで卒業し、42年、東京の通信官吏練習所の語学科に進みました。行政科の同期に6航空教育隊に召集されました。(聞き手・長谷川善威)

つめた田辺誠がいました。通信官吏練習所では、ロシア語学者の八杉貞利さんからロシア語をみっちり学びました。小樽でもロシア向けの小包を扱っていたので、役に立つと考えたのでした。でも、本当に影響を受けたのはその弟子の伊藤先生でした。下の名前は忘れてしまいましたが、伊藤先生は実は共産党員で、ある時喫茶店に連れて行かれ「広瀬君、この戦争で日本は負けるよ。だから、こんなばかな戦争で命を落としてはダメだよ」と諭されました。

ぼくも人殺しは嫌でした。しかし、卒業を目前に控えた42年12月、青森県の八戸飛行場の第6航空教育隊に召集されました。

郵便局員

高給が魅力 出世へ猛勉強

私のなかの歴史

愛は血よりも濃し

③

1942年(昭和17年)12月に最初に配属された八戸飛行場では、「人殺しの練習はしたくない」と、ほふく前進や射撃の訓練はサボったこともありました。

で叱られました。

海外の戦地に行くことと給料が上がるのは知っていたけれど、どうやったら行かずに済むかばかり考えていました。300人程度の中隊でしたが、最初の6カ月で1等兵になれなかったのは、ぼくを含めて3人だけでした。

そんな中、決定的な事件が起こりました。ぼくは通信官吏練習所で教材にしていたロシア語の新聞「プラウダ」や「イズベスチヤ」を、読み切れずにロシア語辞典と一緒に持ち込んでい

ました。ある時、これが抜き打ち検査で内務班長に見つかったのです。「鬼畜米英の新聞を読んでいるやつがいる」と名指し

ロシア(旧ソ連)が仮想敵国であることは知っていました

ひろ せ せい
瀬 清 蔵 さん

黒松内つくし園理事長



14歳のころのぼく。この数年後に召集され八戸飛行場に行きます

で、ぼくは能力を発揮しました。送受した000〰999の3桁の番号を足したり引いたりして、乱数表と照らし合わせて暗号電文を解読するのです。才能があったのか、表彰を何度も受けた。暗号通信士の養成所で教官を務め、ぼくよりずっと年上の老壮兵に教えました。ぼくは、絶対にはげまされ、配属は千葉、熊本などに変わり、終戦は帯広で迎えました。

暗号通信士

「殴らない教官」信条貫く

若者たちを戦場に送り、自由を抑圧した戦争への反省もあつたと思います。ぼくの友人たちもずいぶん戦死しました。戦後、

まえばロシア語ができるから帯広に残れ」と言われました。当時はソ連が北方四島に侵攻し、北海道にも上陸するかもしれないと恐れられていました。結局、小樽に帰ったのは45年11月になってからでした。

戻ってすぐに、組合活動にのめり込みました。唯物史観やマルクス・レーニン主義を勉強する共産党のサークルにも積極的に参加し、当時は秘密にしていたが、46年春に正式に入党します。この時期の写真がほとんどないのは、後に党が焼却を命じたからです。

46年春、小樽郵便局の労働組合の役員選で、後に社会党衆院議員になる島本虎三さん(故人)が支部長に、ぼくは副支部長に選出されました。そして48年、全通の中央執行委員となり、各地でゲリラ的にストを起こす「山猫スト」を指導するため、上京したのです。

(聞き手・長谷川善威)

私のなかの歴史

愛は血よりも濃し

④

1948年、ぼくは全通信従業員組合(現日本郵政グループ労働組合)の中央執行委員として上京し、北海道、東北の地方組織と連絡をとりながら、ゲリラ的にストを展開しました。「山猫スト」です。

の差を感じました。

全国で統一してストを行わないのは、連合国軍総司令部(GHQ)の取り締まりを避けるためです。当時はスト中止勧告に従わないと、沖縄での重労働を課せられました。そこで、各地でストを続発させ、取り締まりを逃れようとしたのです。

しかし、GHQは情報が早かった。全通の土橋一吉委員長や浜武司さん、ぼくら役員7人が

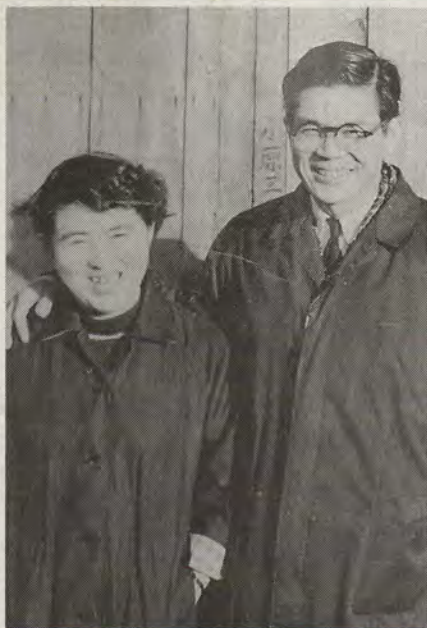
GHQ本部に呼ばれました。応対したのは保守系の全米労働組織の副委員長も務めていたキレン労働課長です。貴重な米国製タバコやコーヒを勧められ、これがうまくてね。米国との力の

キレン課長は「あなたがストを指導しているのは明白だ」と切り出し、「ストは中止して、健全な労働運動をしてください」と言いました。

土橋委員長は「それはオーダー(命令)かサジェスチョン(示唆)か」と問い返しました。オーダーならば、ぼくらは沖縄行きを覚悟してストを続けるつもりでした。キレン課長は「サジ

黒松内つくし園理事長

ひろ せ せい ぞう
瀬 清 蔵 さん



組合活動を通じて知り合った妻博子と、肩を抱いているぼく＝1950年代

エスチョンだ」と返答し、ホッとした記憶があります。思い出深いのは、当時の上野駅の地下道で出会った靴磨きの少年たちです。年に何回か北海道に戻る前に、必ず靴を磨きました。当時は地下道に戦災孤児たちがあふれていた。そんな中の一人と話している

うちに、「君たち将来はどうするつもりだい」と聞きました。すると、少年は「ぼくらのボスは品川という人で、お金をためて群馬に養護施設をつくるんだ」と、それはいい笑顔で話しました。養護施設という存在を知ったのはそれが初めてです。ぼくのすぐ上の兄清もフィリ

ピンで戦死し、ひとことではなかった。そんな孤児たちが夢を語る姿に感動し、靴磨き代金を相場の倍の20銭あげました。後に、孤児の保護活動をしていた品川博さんが、群馬に「鐘の鳴る丘少年の家」建設を進めていることをラジオで知りました。

でも、正直なところ、ホッとしました。というのは、ぼくの命令でストをやった、クビになった人が大勢いたのです。収監された人もいました。ぼくは指導者側にいたから、幸いにして沖縄で重労働せずに済んだけれども、心苦しかったです。

49年春、北海道へ戻ると北教組の支部役員だった吉井博子と結婚しました。しかし、GHQは労働運動を対象にした共産党員らの公職追放「レッドパージ」を始め、その年の8月11日、道内ではぼくと後に小説家になる金丸義昭さん(故人)ら数人が首を切られました。北海道新聞にも大きく報じられ、美唄の姉が小樽まで駆けつけ「おまえ、何か悪いことをしたのか」と叱

レドパージの後しばらく、小樽の電話局敷地内につくった共済会の売店兼食堂で、生活物資や食料品を売って暮らし、生活には困りませんでした。しかし、50年、転機を迎えました。北海道勤医協の専務理事から、後志管内の黒松内村(現黒松内町)に勤医協診療所をつくってほしいと依頼を受けたのです。(聞き手・長谷川善威)

山猫スト

占領下で指導 公職追放に

私のなかの歴史

愛は血よりも濃し

⑤

1950年、ぼくは診療所を開くために後志管内黒松内村(現黒松内町)に来ました。しかし、北海道勤医協の本部は「医師は派遣するが、建物などは地元で準備」という方針でした。後に黒松内町議会議長などを務める小原輝雄さんが、所有する木工場を貸してくれました。この木工場は使ってなくて、1階は生協でした。ぼくたちは2階の一部に病床を作って開業し、山辺富也医師が赴任。ぼくは事務長になりました。

山辺先生は後に北海道民医連の会長になり、87年に共産党推薦で道知事選にも出馬します。でも、診療所開設当時はまだ20

代で、ぼくとそう変わらなかった。オートバイにまたがってこまめに往診に回っていましたね。決して嫌な顔はせず、いつもニコニコして、患者には慕われていました。

病院経営には苦労しました。勤医協本部からは、ぼくと山辺先生に月1万2千円の給料を払うと言われていましたが、実際は診療報酬は勤医協本部に収められ、ぼくらは月3千円しか入らなかった。医薬品は現物支給してくれましたが、爪に火をともしような生活でした。

そんな中、ぼくは週一回「健康な村」という広報誌を発行し、1部10円で売っていました。住

黒松内つくし園理事長

ひろせ 瀬 せいぞう 蔵 さん



児童養護施設の夢を実現した当時のぼく
1957年

ありましたが、おかげで文章を書くのが苦にならなくなりました。

ぼくは51年4月、

共産党公認で村議会議員選挙に立候補しましたが8票差で落選。間もなく肺結核にかかり、診療所の事務長も辞職し、2年間の闘病生活を余儀なくされました。

ぼくはそこ、孤児収容施設職員品川博さんが、群馬県に児童養護施設「鐘の鳴る丘少年の家」をつくらうとしている

のをラジオで聞きました。組合活動で上京した際に、上野駅の地下道で出会った靴磨きの少年たちが「品川さんと、金をためて養護施設をつくるんだ」と言

った時の、輝いた顔を思い出しました。ぼくの心の中に、養護施設をつくりたいという気持ちが生ええました。

そして、体調回復後、公選制の村の教育委員に思いがけず当選しました。落選したら小樽へ帰ろうかとも思っていたのです。支持してくれた黒松内に骨を埋めようと思いました。

養護施設を開設するにはどうすればいいか助言を受けるため、初の女性道議の井口あみささん、児童養護施設「札幌南藻園」の理事だった道議の新川輝隆さ

んを訪れました。2人は道議会民生常任委員会の正副委員長で、組合活動を通じて知り合った仲間でした。

新川さんの紹介で訪れた札幌南藻園では、道の福祉課長をしていた上田敏子さんと出会い、上田さんは「離婚が多くなり、父親のいない子どもが増えている。この子たちのために養護施設をつくってほしいか」と持ちかけてきました。その後、訪れた児童養護施設「札幌育兒園」の天野銀市園長にも「日本の未来は児童にあり。将来を担う子どもたちを、大切に育てなくては」と教示され、ぼくは、養護施設建設の夢を抑えられなくなったのです。

(聞き手・長谷川善威)

黒松内へ

児童養護施設開設が夢に

私のなかの歴史

愛は血よりも濃し

⑥

1955年ごろ、念願の児童養護施設をつくるために、ぼく夫妻は児童養護施設「旭川育児院」に1週間泊まりこみて、施設運営のノウハウを学びました。博子は調理の方法を学び、剣道師範でもあった水下武園長は、ほくに「子どもたちの心を育てるのには剣道が一番」と薦めてくれました。今でも、つくし園の子どもたちに剣道を習わせています。

一方、施設建設にかなりの金が必要だと知りました。当時は社会福祉施設のための補助金はなく、自分で施設を建設し、それを国に寄付するという形をとらなくてはなりませんでした。

旭川育児院で国の設置基準や、寝具や事務用品にどれだけの費用が必要か、そろばん勘定を始めた。

ぼくは小樽市花園町の自宅を売り、小樽の電話局の共済会売店の権利も譲って、建物の建設費265万円をつくりました。

しかし、土地代だけは何ともならず、結局は母マサヨに無心しました。母は蓄えの中から、黒松内駅から南へ1.5キロの約3万3千平方メートルの土地を買ってくれました。妻博子は勤医協黒松内診療所の事務長代理として働き、教員時代の蓄えも取り崩して、生活を支えてくれました。

一方、施設建設にあたって、

黒松内つくし園理事長

ひろせ 瀬 清蔵 さん



黒松内つくし園の前で記念撮影するぼく(後列左端)と子どもたち(1957年)

ぼくが共産党員だったことも大きかったと思います。共産党の施設ができる地域

の猛反対に遭いました。社会福祉への理解が乏しかった時代です。親のいない子どもは不良少年ばかりとみられていました。商店主や農家からは「商品や畑のダイコンが盗まれる」「村内の子どもにも悪影響を与える」という声まで上がりました。

合(現日本郵政グループ労働組合)の主婦の会にいた蔵田綾子さんは、主婦仲間と劇場や映画の券を売っては益金を寄付してくださった。56年春、三和村(現黒松内町)の長谷川俊蔵教育長が代表になって、発起人会の立ち上げにこぎつきました。

前には、黒松内に広がる牧草地にたくさん生えているつくしんぼがヒントになりました。つくしんぼは、踏まれても折られても、まっすぐ伸びるんです。厳しい環境の子どもたちですが、まっすぐ育ってほしいという願いを込めて命名しました。

「黒松内つくし園」という名

(聞き手・長谷川善威)

念願の開園

地域の猛反対を乗り越え